

# しみん基金・KOBE

# NEWS



Vol.51  
2020年7月号

しみん基金・KOBE  
20周年



阪神・淡路大震災  
25年

特別企画

〔共助を支える資金の流れを考える〕



## Contents

特集 「共助を支える資金の流れを考える」 2-9

ふふふな仲間たち - 助成先団体紹介 10

2020年度 定時総会報告 11

しみん基金・KOBEをご支援いただいている皆様へ感謝を込めて

# 共助を支える資金の流れを考える

中須 雅治 × 山下 香 × 室崎 益輝 × 戎 正晴

協力 R 近畿ろうきん



## 共助の二つの必要性

戎 本日のテーマは「共助を支える資金の流れ」です。  
阪神・淡路大震災以降、自助・共助・公助というワンセットの言葉が使われるようになりました。どの次元や単位で助け合い、支え合うのかということですが、特に「共助」という言葉が強調されるに至った経緯や共助を考えることの意義と課題について、まずは室崎先生からお話しいただき、そのお話をふまえて議論していければと思います。よろしくお願いたします。

室崎 阪神・淡路大震災の時に、自助・共助・公助の三つがバランスよく繋ぎ合わせるのが大切だという事を、現実の被害から我々は学んだわけですね。  
生き埋めになった人を誰が助けたかという事、隣近所の人たちが助けあったという事がありますし、避難所や仮設住宅の暮らしを誰が支えたかという事、それはまたコミュニティの人が支え合ったということ、改めて共助ということの必要性を感じたということだと思っております。人と人とのつながりや助け合いというのは、互助というコミュニティのケア、顔見知りの助け合いというものと、共助という顔は知らなくても人として助け合う人道的な助け合い

市民自身が主人公になって市民社会を作っていくとする根幹には、お互いに助け合っ、お互いが主人公になるということがあります。共助には、新しい社会を作ろうということも含まれている。

この二つ、災害時に手の届かない所でみんなで助けあう必要と、同時に今までの少し古い社会システムを作り変えて、新しい市民社会システムを作っていく必要がある。共助という考え方によるパートナーシップみたいなものがとても大切であるということ、共助が見直されたのだと思います。

## 担い手を育てる

戎 ありがとうございます。  
山下さんは実際に、兵庫区、長田区で「下町レトロに首っ丈の会」を運営されておられますが、その経歴の中で「人の建設」という興味深い表現を見ました。それはまさに共助の担い手づくりのことだと思いませんか、今の御活動の中からお話しただけな

いでしょか。  
山下 下町レトロに首っ丈の会ですが、兵庫区、長田区は阪神・淡路大震災で甚大な影響がありました。経済的にも厳しい状態であったんですけれども、その一方で地域を2005年から仲間とくまなく歩きましたところ、昔ながらの



◎ 室崎 益輝(むろさき よしてる)  
兵庫県立大学減災復興政策研究科長、しみん基金・こうべ理事、神戸大学都市安全研究センター教授、独立行政法人消防研究所理事長、関西学院大学災害復興制度研究所長、神戸大学名誉教授、ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長、日本火災学会賞、日本建築学会賞、都市住宅学会賞を受賞するなど建築防災の領域で活動し、防災功労者内閣総理大臣表彰を受けた。

というのがあるって、人道的な助けはボランティアなケアです。例えば我々が他の国で大きな災害があったときに、支援に行くようなものは共助。そして身近な人たちが困っているのを助け合うのは互助です。互助と共助というのは区別しないといけないけど、広く言うところにも共助です。災害の時代を迎えて災害が大規模化すればするほど、共助の必要性が高くなっていくと言えます。必要に迫られて共助・互助が強くなってきたというのがひとつのポイントです。

ただそれ以上に、阪神・淡路大震災で共助が強調されたのは、市民自身が主人公になる社会を作るには、共助が欠かせないからです。

市民自身が主人公になるには、市民自身が自分たちで将来の社会のことを自分たちで決定しなければいけない。長田の真野地区のまちづくりみたいなのが基本なのですが、いわゆるレトロな町工場であったり、喫茶店であったりとか、あと住民の方も色々な職能であったり、趣味であったり、そういうものを持っている方がたくさんいらっしゃいました。本来ですと、まち歩きはその場所に行くのですが、そこにいる人々も紹介したいと思いい、人と空間の発掘を行ってききました。「下町遠足ツアー」というのをを行う中で、訪問した商店や工場、住宅で生活している方の知識や技能に光を当てるといいうのを続けてきました。そんな中で、地元の高齢の婦人たちが手芸活動をしている事に気づきまして、そこから「おかんアート展」という展示会を開催してききました。



◎ 山下 香(やました かおり)  
下町レトロに首っ丈の会 隊長 神戸市兵庫区生まれ。1996年から2004年末まで、イギリススコットランドのグラスゴー(英国立グラスゴー大学)にて建築学、フランスのパリ(フランス国立パリ建築大学ラ・ビレット校)にて都市計画を学び帰国。建築を使いこなす人を発掘し、使い方を設計するという「状況づくり」を目的として、2005年に「下町レトロに首っ丈の会」を結成し、月1回「下町遠足ツアー」の開催や「下町レトロ地図」を発行するなど、地域資源の発掘・発信を行った。2009年からは、ツアーで訪問する先々で下町のおかん達が製作する「おかんアート(母の手芸作品)」の魅力を発信するため、おかんアートをつくるおかんといっしょに「おかんアート展」を年1回開催している。



## 共助を支える 資金の流れを 考える 座談会

山下 2009年にスタートした時は、自分たちが作品を探して展示していたのですが、作っていらっしゃる婦人の方に参画してもらうにはどうすればいいかと考え、作品を展示する場所を自分で選んでもらう、自分の作品の紹介文書を書いてもらったりとか、あとは作品を作ってもらって、やる方同士が集うサミットを開催したり、教室をしてもらうなど、毎年少しずつ参画してもらおうという仕掛けを入れていきました。

そうすると、自分たちでも展覧会を企画するような立場になり、また展覧会を見に来た方々が、スタッフになりたいとどんどん輪が広がっていき、手芸作品を作る高齢のご婦人の方と、おかんアートが好きな30代40代のメンバーが



●中須 雅治(なかす まさはる)

近畿ろうきん地域共生推進室 上席専任役  
大阪生まれ、福岡・伊勢育ち、大学進学で京都へ。1985年に京都労働金庫(当時)へ入庫。営業店での預金・融資業務を経て、本部で共生促進事業に関わる。共生促進事業では、社会貢献預金やNPO融資、労組や生協、NPOと連携した社会貢献プロジェクト等を担当。2019年度、休眠預金を活用した「大阪府地域支援人権財公社」の公募事業に対する審査委員を務めた。

中須 ろうきんそのものは今から70年前に生まれるのですが、労働組合と生協さんが資金を出し合って作られたのが、わたしも福祉金融機関・労働金庫です。当時、銀行はあったのですが、なかなか労働者がお金を借りる所がなくて、戦後間もない頃ですが、当時は高利貸ししかなく、そういう状況だったからこそ、働く人達が生活のために安心してお金を借りられる金融機関を作ろうということで、まさに当時としての共助の仕組みそのものがろうきんの中にあったのかなと思います。

その中で25年前の阪神・淡路大震災以降を契機に、ご存知の通りにボランティア元年とも言われて、NPO法が誕生しました。NPO法により法人格が市民団体に認証され、金融機関と

毎月一回打ち合わせをしながら展覧会を企画して実施するという流れになっていきました。そんな中で、自分の居場所とか自分のイベントとして自覚して、「担い手として自分は何ができるのか」、そういった主体性のよくなるものが一人一人にちよつとずつ見られるようになってきたんです。主体性を育む事業を今は主に行なっているような感じですね。

### 意思ある預金

残 ありがとうございます。普段からこういった活動があれば、たとえば震災のような時にも、ここで作り上げられたひとつのコミュニティやネットワークが、そのままコミュニティケアの担い手そのものになって、ひとつの仕組みとして即時対応できますし、地元を力を引き出す大変意義のある活動だと思います。

さて、今日のテーマはその共助の仕組みを支える資金なのですが、共助の仕組みを動かすにもお金が必要になります。公助の場合は地方交付税や地方税を中心に税金で、自助の場合は自分のお金で動かすわけです。では、共助の仕組みを動かすお金はどうする、それが課題になります。そこで、金融という面から見ると、共助を支えるための仕組みに何か協力をしていただけることがあるのか、実際にやってみようと思いますけれども、近畿労働金庫の中須さんから実際の取り組みも含めて、金融機関から見た共助を資金面から支えるための仕組みについてお話しできればと思います。

しても条件を整えば融資が出来るようになったわけです。ろうきんは労働金庫法で株式会社や営利団体にはお貸しできませんが、NPO法人は非営利団体ということで、生協と同様に融資できるようにしました。

2000年にNPO事業融資というのをろうきんは民間金融機関として初めてスタートさせました。

NPOの資金的なニーズにお答えすることの一つが融資なのですが、その他にNPOの皆さんを応援できる仕組みとして、預金で言えば社会貢献預金に預金して頂ければ、その行為を「意思ある預金」と表現しているのですが、意思のあるお金の流れを作り、寄付金をNPO等の市民団体に贈呈する仕組みをつくっています。また、教育ローンの利用残高に応じて、子育て支援の団体に助成金を寄贈する「NPOアワード」があります。そのような事業を通して、金融機関として、共助の仕組みづくりに取り組んでまいりました。

その他にも地域のNPOの皆さんと連携した事業ということで「NPOパートナーシップ制度」というのがございまして、ボランティア、市民活動の促進に向けた事業を行っています。

東日本大震災や、その後の熊本地震、豪雨災害や大阪地震の際には、被災地支援の市民活動にろうきんとNPOのみなさんと協働・連携した活動を行ってきています。また、阪神・淡路大震災を忘れないということ言えば、「こうべあい・ウォーク事業」に協力という形で参画させていただいています。



おかんアート展の様子



おかんアート展の作品

地域が良くなりたければ働く人・市民の暮らしも良くなりません。地域社会をよくするために頑張っているNPOを応援するのはろうきんとしての社会的役割でもあると考えています。NPOや市民活動を知り、活動に参加することを通して市民の皆さんの共感に繋がります。その共感が寄付という形で循環していけば、より共助の幅が広がるのではないかなと思います。ろうきんは共生社会の実現というのを理念として取り組んでいるので、そういうところをめざす取り組みとして今後も進めていきたいと思っています。



● 戎 正晴(えびす まさはる)

認定NPO法人しみん基金・こうべ理事長  
弁護士、明治学院大学・政策研究大学院大学客員教授、現近畿震災対策まちづくり支援機構設立メンバー、専攻は、マンション法制・災害復興法制。



社会を動かすエンジン

戎 ありがとうございます。ろうきんさんそのものが共助の仕組みではないかというような話もありましたし「意思あるお金」という印象的な言葉もありました。まさに「意思あるお金」をどうやってきちんとした共助の財政的基盤にするかということが問われていると思うのですけれども、室崎先生、市民活動のお金の側面をどのように考えたいのか、どんなところに課題があるのかについてお話しいただけますでしょうか。

室崎 三段論法で説明させていただきます。

まずは社会を動かしていくにはエンジンのようなものが必要ですね。空気だけでは動かせないので。じゃあ、社会を動かすエンジンになるものはなにかというと「人と物とお金」なんですよ。

二つめには、人と物とお金があったら上手くいくのかというと、それを動かす仕組みがないと上手く行かない。その仕組みということでは、山下さんのおかんアートや下町レトロにまつ会の会も仕組みだし、ろうきんも仕組みです。もう一つ言うと我々のしみん基金・こうべも仕組み。このお金と人を動かす仕組みを我々はしっかりと持たないといけない。この2番目の仕組みというのがとても大切です。

じゃあ今度は仕組みがあればいいのかと言うと、さらに、その社会に必要な正しい共助の考え方に基づいた理念がないと、仕組みがうまく機能しないということだと思えます。

自分たちが手芸を教えるという行為によって得られる収入や、作品販売の売上3割を翌年のために貯金していく。また毎年出展する時のチラシであったり冊子を作る時の資金になるように、参加費を徴収するなど、出展者たちが自分たちで、お金の事を考え始めました。それで少しずつ回ってきているところがあります。しかし、まだまだ全体をまかなって行くわけではなく、今年地域居場所であるサロンを運営していくように思い、今年度は助成金を申請させて頂きました。



共助という理念に基づく仕組みです。やはりお金は共助という理念のもとにちゃんと流れていかないといいなくて、私腹を肥やす形で流すものではない。お金の流れにも民主的な関係性とか、お互い尊重しあう関係性がある。共助の理念を踏まえた生きた形でお金が流れていかないといいけない。それはまさに、中須さんが言っていたろうきんの精神そのものなんです。

自分たちで自分たちの社会を作っていくうえで、必要なところに必要なお金を回す必要があります。だからお金は集めるところにも共助の概念がいるけど、使うところこそ共助の概念がいる。どこに使うのかという使い方が問われていると思っています。そうすると、資金というものを必要な所に必要な形でちゃんと配分するようなシステムがある。必要な人に必要な新しい社会のために、必要なお金を配るような仕組みを作らないといけない。だけど、なかなかそれが現在できていない。そこで問われるのは、必要どころに資金を配るための仕組みをどう作っていくかということ。しみん基金・こうべの活動そのものがそうです。お金を集め、集まったお金を社会のニーズだとか、未来の可能性みたいなものを踏まえながら、配る。お金を配りながら育てていく。民主的な配分をする仕組みを持たないといけない。話が後先になったのですが、民主的な配分をする前に、集めるプロセスを民主的にしなくてはならない。配るだけではなく、集める。集めるために寄付文化を育む。しかし、残念ながら特に日本の社会の寄付文化は定着していないですね。

寄付文化の醸成のために

戎 金融という仕組みの中で色々と市民活動を支える活動をして来られた近畿労働金庫さんですが、先ほどの特定の目的で寄付される「意志あるお金」ですが、その仕組みをもう少しご紹介いただけませんか？

中須 「意思のあるお金」の流れですが、労働組合の組合員さん、あるいは生協の組合員さん、いわゆる市民・預金者の方々がろうきんの社会貢献預金(笑顔プラス)にお預けいただけます。預金者の利息負担(金利引下げ分の利息相当額)とろうきんからの拠出金とあわせて近畿2府4県で活動されているNPO等市民団体(12団体)に年に一回寄付金を贈呈する仕組みとなっています。

そして、各寄付先団体はその寄付金を使って、よりよい社会づくりに向けた活動を行います。労働組合・生協の組合員、市民にはそういう活動に参加できる機会をご提供しています。参加という形態には、学習会からシンポジウム、あるいはいろんなプログラムやイベントへの参加があります。このような何らかの社会運動、活動に参加することで、よりその団体のことを知ることにつながるのです。プラスアルファの寄付をしようかだとか、その他のイベントに参加してみようかとか、ボランティアへの参加につながるような仕組みとして、「笑顔プラス」という社会貢献預金をご案内しています。先ほども「どこに寄付したらいいかわからない」というお話がありました。具体的に

戎 市民活動を支えるために寄付をする。その寄付もまた一つの市民活動である。それが、私ども「しみん基金・こうべ」のよって立つところなんです。そもそも、市民活動の中だけでお金を回せないだろうかというのが最初です。共助では寄付↓活動↓寄付↓活動という流れでもって民主的に集めて、市民活動の中だけで資金を還流させる必要があるだろうということです。また、寄付文化を育てるといっても私どもの目標ではあるんですが、これがなかなか難しい。「寄付をしたいけど、どこに寄付したいかわからない。」というような方のお金を私どもが受けて、各団体にこちらの方で助成をするような仕組みは作ってあるんですけども、寄付をしようとする側からはどうい団体がない活動しているのかかわからないという声をききます。既に3回実施しましたが、寄付を必要としている人と、寄付したい人をマッチングするというその意味で「タニマチツチング」と名付けられたイベントをやっている、寄付文化もなんとか育てていこうとされていますが、いかにせんだまだ規模が小さいです。

話題を転じましょう。山下さん、実際に活動をされている、資金面についてなにかこんな仕組みがないのかとか、こんなことがあったらいいのになというのをお感じになるようなことがありますか、いかがでしょうか？

山下 私達も始めた頃は補助金を元にスタートしたのですが、おかんアートの話でいうと、ある時から売上であったり、教室の売上の3割を次年度に貯金しようという話になってきました。

中須 寄付先団体をご案内していると、「ろうきんが選んでるから安心」というお声もあり、より活動が見えたりすると、そこを選んで別途寄付される労働組合があったりとか、もう少しこの活動を知りたいということでも学習会などのご要請を受けたりすることもございます。

そのほかに「NPOパートナーシップ制度」というのがありまして、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大に対するNPO支援をしようとして、近畿圏の各NPO中間支援センター、兵庫というとシンフォニーさんと、コミュニティ・サポートセンター神戸さんなどと連携して各センターが企画される事業（セミナーやシンポジウムなどのプログラム）を応援する仕組みがあります。

ろうきんでは、パンフレットやホームページ、フェイスブックなどを通して、寄付先団体の活動をフィードバックして、少しでも活動を知っていただくような営みをしております。そのことがなんらかの活動への参加や寄付のきっかけづくりになれば、おっしゃられた寄付文化の醸成につながっていくといいかなと思っております。まだまだ果てしない取組みですが。（笑）



共助の中で流れているお金が、ものすごく豊かな価値を生み出すんだという実績を、ちゃんとみんなが知ってもらおう努力をしないとけない。本当はゆたかな活動がいっぱいあるんだけど、それがなかなか知られていないという所もあるし、気づいてもらえていない所もある。その共助の資金によっておおきく育った市民活動をどういう形でみんなの目に見えるようにする取り組みも、お金を集める側としても必要なもので、単にお金を市民の中に流すだけではなくて、それをうまく流れていく中で、大きな花を育てていくようなプロセスが共助の中に求められているような気がします。

戎 おっしゃるとおりですね。公助よりも共助で回したほうがいいような部分が実はいっぱいあって、共助の仕組みが活かされる実績作りが大切だと思えます。そしてその中から公助化されるものが出てきてもいいと思うんです。共助の仕組みが制度化されて公助の仕組みになって、財政で回っていきければそれはいいことだと思えます。そういう意味でもこの神戸の地での共助の仕組みをもっと盛んにしてみなさんと一緒に実績を作っていきたいと思っております。

最後に山下さんの方から、お金の面の課題はあるけれども、それでもその共助の仕組みからの実績を作っていたらいいというその決意表明も含めて最後に一言おっしゃっていただければと思います。

山下 最近、クラウドファンディングという新しいのが出ていますよね。あれは、ちょっと参加できるような仕組みが



入っていたりしまして、お金を寄付するってちょっと参加していきよってというふうな、そのふたつの所をうまく組み合わせたりすると、寄付文化っていうのは、実は自分が何かに参加する文化でもありますよ、と置き換えることができるかなと。

寄付文化は何か施すみたいなイメージがあるかもしれませんが、自分が楽しいと思ってる、自分が、実は人のためになつていったという、利他的利己主義という言葉聞いたことがあるのですが、利他的な活動に留まるのではなく、利己的でもあるけれども、それはたまたま利他的にもなつていったという作りこみはすごく重要なのかと思いました。私たちがおかげでアートの話だと、趣味なんて本当は自分だけでやっていたらしい世界だったんだけど、実は地域の役に立ったりとか、自己肯定感をあげたり、そしてその方が担い手になっていきえるのかというのを、実験しつつ、どうやって、どんな形で、自分たちの活動に対して、自分たちで出資するような気持ちを持ち始めるのかを実験してみたいなっていうのはありますね。

戎 交換価値でもないし、使用価値でもない。もっと「充実（やった）感価値」というか、満足的な意味での価値というか、そういうものが貨幣のように流通して回っていくような社会っていうのはあってもいいような気がします。

山下 それとお金を出すことが何らかの付加価値が重なるような、何かしらそういう設計ができればいいなと思います。

戎 お金にそういう価値が入っていて、それが回る。

## 付加価値を生み出す共助

戎 ありがとうございます。どこに寄付してよいかわからないという声はたしかにあります。市民活動の多様性をもっと広報する必要はあると思いますが、ろうきんさんのような信頼できる団体が選んだり、報奨したところというのは一つのスタンダードになりますね。

室崎先生にお尋ねしたいのですが、公助と共助の役割分担ということもあると思うのですがその辺りはいかがですか？

室崎 公助が直接自助にお金を渡すより、その間に共助が入って、公助が共助にお金を渡して、共助から自助にいくという流れにしたほうが場合によっては細やかな対応ができる。

ただそうはいくもの、まったく公助がいらないかというわけではないので、公助、共助、自助の役割が、役割に応じてお金を動かしていかないとけない。

公助は、細やかな所とか、本当に市民が求めているものに気がつかない。また、公助は紐がついて使途が決められている、自由度がない、細やかさが無い。本当に自由な所にサポートができるのは共助のもつてるところなので、その資金面、財源面で見た時も、共助の部分をもっと大きくしなければいけない。公助も必要だけど、もっと共助の力をお金的にも強くした方が、市民のいろんな暮らしがゆたかになるし、活動も活発になるといことだと思っております。

山下 お金がエネルギーのように循環する。

室崎 前の理事長は黒田裕子で、この基金を作った趣旨もそうなんですけど、彼女は与える支援はよくない、その人の力を引き出す支援をしないとけない、さらにともに創り上げる支援、新しいものを生み出す支援、価値を生み出す支援をしないとけないと、言っています。循環の価値の話ですよ。まさに共助の資金のあるべき姿は、そこだと思えます。

戎 価値創造ですね。

中須 前段でご紹介いたしました社会貢献預金（笑顔プラス）も、寄付先団体の活動を紹介しながら、「人をむすぶ、ここをつなぐ」、そして「社会に笑顔を増やす」、そんな取組みへの共感が預金残高「78億円」（2020年3月末時点）につながり、2020年6月の寄付金は約3億16万円となっています。これらの取組みを通して、寄付文化の広がりに寄与できればと思っております。

戎 本日はお忙しいところありがとうございました。一同 ありがとうございます。



2019年度収支決算概要

【経常収益】		66,376,516
受取会費	581,000	
受取寄附金	1,980,605	
受取助成金	2,688,000	
事業収益	1,103,000	
その他収益	23,911	
【経常費用】		7,145,602
事業費		
人件費	3,124,105	
その他経費	4,021,497	
管理費		
人件費	551,311	
その他経費	231,588	
当期経常増減額		△1,551,985
【経常外収益】		892
当期正味財産増減額		△1,551,093
前期繰越正味財産		23,196,752
次期繰越正味財産額		21,645,659

### 2020年度 定期総会報告

5月28日18時より定期総会を実施し、以下の議題について審議を行い、承認されましたのでご報告いたします。

#### 2019年度事業報告並びに決算報告(抜粋)

1 助成事業

- 助成事業では、7つの団体に2百45万5千円を助成しました。
- しみん基金・こうべ特別賞は神戸・心絆に贈呈しました。第3回黒田裕子賞は原隆賠償関西訴訟原告代表として森松明希子さんに贈呈しました。

2 寄附・募金活動

- 寄附・募金では、1百96万2千7百93円を託していただきました。



小学生からでも出来る、復興支援。初参加や学生、親子連れは優先で参加できます。

### おたがいさまプロジェクトさん

自然災害の泥で汚れてしまった写真を一枚一枚丁寧に洗浄し、被災者のもとに返す復興支援を行っています。おたがいさまプロジェクトが運営。今は倉敷市真備町(西日本豪雨)と、栃木市(台風19号)の写真を扱っています。写真洗浄は子どもから年間配までできるボランティアですが、被災者の思い出を守る大切な活動です。神戸で出来る復興支援。良ければ皆さんいかがですか？

月1回 神戸青少年会館で行っています。次回は9月6日を予定。詳しくは「神戸写真洗浄」で検索を

■こうべあいウォーク2020を行い、こうべコープのご協力により、ゴール地点での豚汁を再開できました。

■神戸洋菓子「ボックサン」並びに舞夢舞台ウエスティンホテル淡路のご協力により、寄付つき商品として販売、年間売り上げの3%が寄付されました。

■フルハウスのご協力により、寄付つき商品として販売、年間売り上げの5%が寄付されました。

■「ボランティア宅本便」「Yahoo!ネット募金」「モノでキフ」で寄付をいただきました。

■榎長崎屋ホワイト急便神戸、(株)神戸国際マーケティングと連携し古着チャリティ事業を行いました。

3 その他中間支援事業

- 神戸市との協働協定により、市民活動応援サイト「つながり神戸」の管理運営を行いました。
- ハンズオン型NPOマネジメント支援講座を継続して実施しました。
- はあくとふるふあんど支援事業を行いました。
- 第4回チャリティ×防災啓発イベント「ローリングストックinひょうご」2019を行いました。
- 震災25年「共助を支える資金の流れを考える」シンポジウムは新型コロナウイルス感染拡大を受け、中止となりました。

#### 2020年度事業計画並びに予算(抜粋)

1 助成事業

- 助成事業を例年通り実施いたします。

2 寄附・募金活動

- 寄付つき商品や現物寄付を継続いたします。

3 その他中間支援事業

- つながり神戸を継続して管理運営いたします。

2020年度収支予算概要

【経常収益】		6,325,000
受取会費	840,000	
受取寄附金	2,735,000	
受取助成金	1,550,000	
事業収益	1,170,000	
その他の収益	30,020	
【経常費用】		6,178,276
事業費		
人件費	2,257,600	
その他の経費	3,920,676	
管理費		
人件費	398,400	
その他の経費	170,184	
経常収支差額		△421,840

■はあくとふるふあんど事業は兵庫県遊技業組合の決定により中止となります。

■チャリティ×防災啓発「ローリングストックって？」はコロナウイルス感染拡大防止のため中止となります。

■神戸青年会議所、ひがしなだコミュニティメディアにご協力いただき、コミュニティ・サポートセンター神戸とはんしん高齢者くらしの相談室との三者協働で、「第4回寄付がちなげるひと育てるまちtanimatching」を開催いたします。

■役員選任について  
任期満了により改選を行い、全責重任されました。

■基本財産の取り崩しについて  
やむを得ない場合に限り、5百万円を上限に基本財産から運用財産委譲り入れることを承認されました。

## な仲間たち

-助成先団体紹介-



ポスターやチラシの整理もまるで玉手箱のなかを探るようなワクワク楽しい時間です

### 神戸映像アーカイブ実行委員会さん

新長田の再開発地域、アスタくにづかの一角にあるこちらまりとしたシアター。

会の活動は、神戸映画資料館が所蔵する映画フィルムとその関連資料のポスターやチラシなどを活用して、神戸の歴史文化の発展に役立つことを目的としています。

膨大なフィルムと資料を残し大切に活かしていく。それがこのプロジェクトの特長です。公のアーカイブでは使われる税金との関係で資料の価値判断に一定の制限が生じる可能性もありますが、市民活動には自由に判断できるよさがあります。

関連資料の整理・分類作業があり、現在ボランティアは30人。興味のある方は会のホームページをご覧ください。喫茶店が併設されたミニシアターにもぜひ寄ってみてください。

「しみん基金・こうべ」の運営を支えて下さる賛助会員と寄付を募集しています。

個人会員 年間 3千円  
 団体会員 年間 1万円

お申し込みは電話・ファクス・メールなどで、ご連絡いただくか、ホームページをご参照ください。

★振込口座

三井住友銀行三宮支店 普通 8840183  
 近畿労働金庫神戸支店 普通 4161854  
 郵便振替 00990-5-157334

口座名義 「特定非営利活動法人しみん基金・こうべ」



当基金は認定NPO法人格のため、当基金へのご寄付並びに、賛助会費は・・・



個人では、寄付控除を受けられます。

税の優遇措置を受けるには、確定申告をしていただき、その際当基金が発行する寄附金受領証明書

(「領収書」)を添付して税務署にご申告をお願いします。

「小口寄付にも効果のある「税額控除」

高所得者がお得な「所得控除」

どちらかお選びいただいてご申告いただけます。



法人では損金算入限度額が増え、一般のNPO法人への寄付と比較して経費にできる寄付額の限度 額が大きくなります。



相続人は、相続財産のうち寄付した額が非課税になります。

会員数とご寄付のご報告(2020年6月末)

◆正会員 個人31名 2団体  
 賛助会員 個人42名 16団体

◆寄付・募金合計金額 31万6千9百11円

◆寄付者・募金一覧(敬称略・順不同)

飛田雄一、中島秀男、中谷豊、瀬戸口延恵、安原武志、  
 関フルハウス、関フルハウス技研、関ボック、ヤブー関、  
 関夢舞台ウエスティンホテル淡路、(株)神戸国際マーケット、  
 神戸大学持続的災害支援プロジェクトKONTI募金箱、  
 ひょうごボランティアプラザ募金箱、しみん基金・こうべ  
 募金箱

(2020年3月～6月)

※皆様方からの貴重なご厚志に感謝申し上げます。



※ご寄付、会費納入は、クレジット決済もご利用頂けますのでご利用ください。

当基金ホームページトップページの「クレジットサポーター」からアクセスできます！

編集後記

2月の開催予定を中止にした、震災25年企画のシンポジウムに代わり、座談会を開催しました。当基金20周年であり、震災から25年の今年は予想もしなかったコロナ禍にあります。人々の絆を断ち切るうとするかのようなウイイルスと共存しつつ共助の理念で乗り切りましょう。(と)

編集・撮影 / 大竹 修

しみん基金・KOBÉ NEWS Vol.51

認定NPO法人 しみん基金・KOBÉ

発行日2020年7月17日

〒651-0095 神戸市中央区旭通1-1-1-203(サンピア2F)

[TEL] 078-230-9774 [FAX] 078-230-9786

[MAIL] kikin@stylebuilt.co.jp

[URL] http://www.stylebuilt.co.jp/kikin/



※セブンイレブンの北側の階段を上って2階右手の通路すぐ